

石井正信 (イシイ マサノブ) | イラストレーター

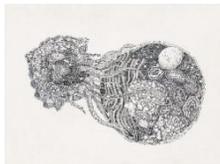
1985年生まれ。イラストレーター、グラフィックデザイナー。静岡県出身。日本大学芸術学部デザイン学科コミュニケーションデザインコース(当時)を卒業後、デイリーフレッシュ株式会社に入社。2010年から株式会社カイブツに所属。芥川賞作家の平野啓一郎氏の毎日新聞での連載小説「マチネの終わりに」の挿画を担当。大胆な構図・モチーフを極繊細な線で描きあげる作品にファンも多い。



●展示作品タイトル『幻想免疫図鑑』

作品紹介コメント>

免疫についての文献を読み進めるうちに、ひとつひとつが「個別の意思」を持った生物のように思えた。肉体の内側に広大な世界が広がり生命が溢れている、奇妙な感覚。そこで躍動する生物たちのイメージを紙に落とし込んだ。この生物の内側にもまた、広大な世界があるのだろうか。



●過去の代表作品

平野啓一郎『マチネの終わりに』挿絵



清川進也 (キヨカワ シンヤ) | 音楽作家

「拡張音楽」をコンセプトに音楽の新たな機能性を追求する音楽家。環境音を楽曲として再構築する音楽技法(サンプリング)を得意とし自ら映像撮影と録音を同時に行いながら収録した環境音素材による音楽映像作品を多数発表。2011年にはサウンドデザイナーとして携わった『森の木琴』がカンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバルにて3冠に輝いた。



●展示作品タイトル『スパイラルリズム』

作品紹介コメント>

人間の体内で原子のメカニズムとして息づく、免疫。この存在を表現するために、もっとも原子に近い楽器は何かを考えた。その楽器とは、自然物を加工して生まれたものではないか。木琴という原始的な打楽器を用い、免疫という人の根本に、エネルギーを届けられないだろうか。木々を打ち奏でられるメロディには、人の免疫を活性するという明るい音楽がいいと決め、長調感の際立つ名曲、エルガーの「威風堂々」をセレクトした。

●過去の代表作品



KO-TONE
Spiral Xylophone

勅使河原 一雅(テシガワラ カズマサ)| 映像作家

1977年東京池袋に生まれた。はじめは母親と二人で過ごした。途中から新しい家族の家で過ごした。幼い頃から飲み屋を連れ回された。当時はホステスにもてた。登校拒否をしていた。家ではゲームをしていた。借金取りが怖くて泣きながら警察を呼んだ。父が居なくなった。小学校卒業。父が帰ってきた。父が死んだ。中学校卒業。日本橋服地加工工場に勤めた。音楽に夢中になった。中古のMacを買った。何人かのおかしな人に会った。別れた。知らず悪い企画制作会社に入るがすぐ辞めた。いくつかの職場を転々とした。二一歳、デザインをすることが楽しくなった。やがて結婚した。子供が生まれた。離婚した。子供を引き取った。子供を育てる。Qubibiを屋号にして活動する。沢山のものを作りた。



●展示作品タイトル『混沌の王国』

作品紹介コメント>

私と、私以外とが免疫により識別されているとしたら、その間には何が、どのような光景を描いているのだろうか。ここでは免疫世界での自己・非自己における「境界」と、私が今まで見つけてきた「境界」とを、重ね合わせてみようと思う。

●過去の代表作品

MuDa Zurich(Museum of Digital Art)個展



DAISY BALLOON(デージーバルーン) | バルーンアーティスト

バルーンアーティスト細貝里枝と、アートディレクター・グラフィックデザイナーの河田孝志からなるアーティストユニット。2008年結成以来、「感覚と質」をテーマに掲げ、バルーンで構成された数々の作品を制作。なかでもバルーンドレスは、繊細さが細部まで行き渡った建築物を思わせ、多くの人々を魅了している。また、彼らは日々、哲学的テーマを探索して、物や人とディスカッションすることをフィールドワークとしているが、その眼差しは常に、他者との本質的な融合に向けられている。



●展示作品タイトル『bridge』

作品紹介コメント>

私たち DAISY BALLOON は、体内の病原体に対して形成される「自然免疫」と「獲得免疫」という二つの防衛ラインを往来する樹状細胞に着目しました。樹状細胞とは、侵入してきた敵を発見し攻撃する「自然免疫」の形をとりますが、それよりも、主な活動は、あらたな免疫を生み出す「獲得免疫」の情報源としての架け橋のような役割だといいます。

このような架け橋という役割に瞠目したのは、生物が進化の過程で選びとってきた「自然免疫」と、日々進化する病原体の“いま”に対抗する「獲得免疫」の狭間に立ち、情報をバトンとして受け渡すという行為に共感したからです。人間が営む実社会の世界では、歴史が培ってきた生得的なもの、あらたに獲得される後天的なものは、多くの場合、反目されると考えられがちですが、免疫の世界は新しきものが古きものに、とって替えられるのではなく、たとえいずれかが結果的に淘汰の道を歩むとしても、お互いが協力し合い進化を遂げてきました。

私たちの活動もまたこうした二つの世界に跨って、橋のような役割を担いたいと考えています。バルーン・アーティストとして先人たちが築き上げてきた世界に敬意を抱きつつ、その外側にある世界に踏み出し、あらたな表現を実践していく。一度俯瞰して、異なる世界に触れて学ぶことで、認識を拡張し、もう一度あらたに世界を捉え直すことができるかもしれません。

乳酸菌R-1株は、生物が培ってきた歴史ある「自然免疫」を活かしながら、あらたな「獲得免疫」を呼び起こすことで、人間の進化を促しているように感じられました。つまり、それは生物が歴史的に培ってきたものへの敬意と、未来への挑戦の二つを同時に成し遂げることであり、過去と未来を“繋ぎ合わせる=bridge”のような働きと言えるかもしれません。どのような分野においても、進化の本質とは、もともと自分たちが所有しているものを活かしながら、新たなものを取り込み、再構築していくことでひとつの貢献をおこなっていく、そういうものだと思われは信じています。

●過去の代表作

Behave



Astral



Mobile



吉田愛（ヨシダ アイ） | 建築家

1974年広島生まれ。2001年からSUPPOSE DESIGN OFFICE。2014年より谷尻誠と共同主宰。広島・東京の2カ所を拠点とし、インテリアから住宅、複合施設など国内外合わせ多数のプロジェクトを手がける傍ら、空間のディレクションやスタイリング業務も自らで行うなど、様々な分野の領域を横断しながら新たな建築空間の可能性を模索している。最近では東京事務所に飲食業態「社食堂」や不動産屋「絶景不動産」を開業するなど、活動の幅も広がっている。



●展示作品タイトル『無意識と意識が介在する庭』

作品紹介コメント>

感染した病原体を特異的に見分け記憶し同じ病原体に出会った時に効果的に排除する獲得免疫、受容体を介して侵入してきた病原体や異常になった自己の細胞をいち早く感知し排除する自然免疫。獲得免疫と自然免疫の二大システムの相互作用により病原体に対する防衛ラインを形成しているという近年の免疫学の見解もさることながら、私がおもっても興味を引かれたのは海面動物から進化の過程に合わせ獲得した免疫システムが今この瞬間に体でおこっている感染症に対しオンタイムで自分の体内で作用しているという事実だ。

普段意識の外側にあるけれど実は人間を活かしている自然という存在に気付くことのおもしろさを、例えばインテリアは建築の一部であり建築は都市の一部であるというようにミクロとマクロの視点を横断しながら物事を考えることで無意識に意識を向ける、そういった普段建築を通して考えていることに置き換えて表現したいと思った。

サボテンという静的な植物の中でうごめく細胞や生命力を、磁性流体という意味を持っているかのような液体を使って自然界にある有機的な動きや情報伝達というデジタルな動きで表現し対比させることで無意識を意識する気づきのきっかけのようなものになればと考えた。

●過去の代表作

ONOMICHI U2(2014年 広島県尾道市)

Photo by Toshiyuki Yano



●受賞歴

- 2017年 日本建築学会 第10回建築九州賞 住宅部門作品賞 / 桧原の家
 - 2016年 JCDデザインアワード2016 大賞 / BOOK AND BED TOKYO
 - 2016年 東海住宅建築賞2016 優秀賞・中村賞 / 表山の家
 - 2016年 福岡県美しいまちづくり建築賞 大賞 / 桧原の家
 - 2016年 住まいの住環境デザインアワード2016 グランプリ、九州の家賞 / 安城の家, 桧原の家
 - 2015年 中国建築大賞2015 一般建築部門 大賞 / ONOMICHI U2
 - 2015年 第3回東海住宅建築賞 優秀賞 / 安城の家
 - 2015年 JCDデザインアワード2015 準大賞、BEST100賞 / ONOMICHI U2、くるりの森
 - 2015年 International Prize for Sustainable Architecture 2015 (Italy)金賞 / ONOMICHI U2
- など、その他、国内外多数の賞を受賞。